

## 主の再臨を待つ人の心得

### ルカ福音書17:28-37

17:28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、  
 17:29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。  
 17:30 人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。  
 17:31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。  
 17:32 ロトの妻を思い出さない。  
 17:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。  
 17:34 あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。  
 17:35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」  
 17:37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

### 【祈りながら考えよう】

- (1) 神の事を第1とする生き方は戒律ですか、それとも神の恵みの結果ですか。
- (2) 「ロトの妻」は何が問題でしたか。なぜ「塩の柱」にされてしまったのですか。
- (3) 37節の「死体のある所、そこに、はげたかも集まります」とはどういう意味ですか。

### 【解説】

今日の学びの箇所は、「神の国はいつ来るのか」と、パリサイ人が尋ねたのに対して、イエスがお答えになった答えの箇所の続きである。

神の国が来るためには、まず第1にどうしても起こらなければならないことがある。それは神の御子イエス・キリストが十字架にかかって死ななければならない。

イエス・キリストがこの地上においてになったそのご目的は、そのままこの地上を神の国にするためではない。ご自身の身を十字架につけて、まずすべての人の罪を解決するという、これが第1の目的であった。

そのことがなされて、そしてイエスは復活し、昇天し、神のみもとに帰られる。その次に「キリストは再臨されて神の国が実現する」のである。

キリストの十字架の出来事はすでに二千年前に成就した。だから、次に来るものは「キリストの再臨」、そして「神の大審判と神の国の実現」ということである。

これはやがて、今より後、いつかわからないその時に、突如としてキリストは再臨され、この世は終わり、神の国が実現する。そういう所に私たちは今日立っている。

### （1）神の事を第1にして生きる人の動機

また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。(28-30節)

ロトの時代に、ソドムの町が滅ぼされた時のことと関連して、主イエスは次のように警告された。

その日には、自分の財産などに未練を持たないようにすることです。そのことについては、ロトの妻の教訓を思い出さない。自己保身的な人は、かえって大事な命を失ってしまう結果になり、わたしのために、喜んで自己犠牲をする人は、それを本当に自分のものとしてすることができます。(33節/現代訳)

主の再臨の時に、まだこの世のものに未練のある人は、主の再臨によって完成される神の国を待望して生きていないわけであるから、神の国がそこに実現してもそこに入ることのできない人になってしまう。

今、私たちがどのような生き方をしているかが問われる。神の事をいつも第1にしているか、それとも自分のことに最大の関心があるかである。

神の事を第1にして生きている人は、神のために喜んで自己犠牲を払う生き方をします。これは（戒律）でもなければ、（義務感）からそれをするのでもない。主の恵みによって生かされた者として、そうしないではいられないのである。献金について考えてみても、そのように言うことができる。

「私たちが献金をしないではいられない最も深い動機は、イエス・キリストがご自分をささげられたところにある。主イエス・キリストは、神の輝かしい栄光を持っておられたのに、（私たちを救うために）、それをすべてささげてしま

われた。それは、私たちも、このキリストからすばらしい祝福を頂くことができるためである。」

このことは、主イエスの所に高価な香油を持って来た、罪深い女として知られていた女のしたことについて、主イエスが言われた御言葉においても示されている。

わたしは、「この女の多くの罪は赦されている」と言います。それは彼女がよけい愛したからです。

しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。(ルカ7:47)

このことから分かるように、主の恵みによる救いをどれだけ深く自覚し、感謝しているかが、神の事を第1とするかどうかにかかっていると言ってもよい。

### （2）ロトの妻を思い出さない

その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。ロトの妻を思い出さない。(31-32節)

その《日》にこの世の物に執着していると、自分のいのちを危険にさらすことになる。もし《屋上にいる》のなら、《家》の中の物や財産を持ち出そうとしてはならない。もし《畑にいる》のなら、《家に帰って》はならない。今にもさばきが下ろうとしている場所から逃れるべきなのである。

《ロトの妻》はほとんど（力づくで）ソドムの町から連れ出されたが、その（心）はまだ町の中にとどまっていた。彼女が振り返ったことがその証拠である。彼女はソドムの町を出ていたが、彼女の（心）からソドムの町が消え去ったわけではなかった。心はソドムとつながっていた。ソドムの生活から離れることができなかった。その結果、神は彼女を（塩の柱）にして滅ぼしてしまわれた。



ロトの妻を思い出さない

### （3）主に忠実であるがゆえにいのちを失う者は永遠にそれを保つ

自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。(33節)

身の安全ばかりを気にして、自分のたましいのことは気にも留めずに《自分のいのちを救おうと努める者》は、それを失う。それに対して、この患難時代に主に忠実であるがゆえに自分のいのちを《失う者》は、実際には永遠にそれを《保つ》ことになる。

### （4）主の再臨は分離の時となる

主が来られる時は（分離の時）となる。主イエスは主の再臨の時に起こることを、このように語られた。

あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」(34-36節)

主の再臨の時には、信者はただちに栄光の体に変えられて、天の御国へ携え上げられる。しかし、不信者はそこに取り残され、恐ろしい裁きを受けなければならない。だから、主の再臨は、信者にとっては救いの完成の時であり、喜びにあふれる時であるが、不信者にとっては恐るべき裁きの時となってしまふ。

主がいつ来られてもよいように、私たちは御国を待ち望みながら、それを楽しみにして生きよう。主の復活の力を頂いた者たちとして、私たちはそのように生きることができる。

ちなみに、34節と35節は地球が丸いことと一致する。この記事が示すとおり、地上のある地域が夜で、別の地域が昼であるということは、ずっとあとになってから科学的に証明された。

### （5）死体のある所、そこに、はげたかも集まります

主イエスが弟子たちにこれらのことを語られると、弟子たちは、主イエスにこう質問した。

「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」(37節)

「死体のある所には、はげたかが集まるように、滅ぶべき人のいる所、どこにでもわたしは現れます。条件さえそろえば、わたしはいつでもまた来ます。」(37節/現代訳)

救い主の話を聞いた弟子たちは、主の再臨が、神の教えに背いた世界に対して天から下る恐ろしいさばきであることを完全に理解した。そこで彼らは、このさばきが《どこ》に下るのかを《主》に尋ねた。

主の答えは、《「死体のある所、そこに、はげたかも集まります」》というものであった。《はげたか》は、さばきが閻魔に迫っていることを表している。つまり、神に対する不信仰や反逆には、それがたとどこで見出されたとしても、必ずさばきが下るといことである。

今の日本の姿を見ると、いつ主がもう一度来られて、最後の裁きをなさってもおかしくないと思える。あのノアの時やロトの時と少しも変わらないように思える。なぜ主の再臨が今すぐに起こらないのか。神は憐れみによって、日本人が悔い改めるのを待っておられるのかもしれない。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。

かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(Ⅱペテロ3:9)

私たちは一人でも多くの人々が滅びることなく救われるために伝道に励もう。私たちが語らなければ一生涯、福音を聞くチャンスのない人が、周りにいるかもしれない。

それは、あなたの家族の中の人であるかもしれない。同じ職場の人であるかもしれない。あるいは学校の友人であるかもしれない。主は、あなたをそこへ（宣教師）として遣わされていることを覚えよう。